

植物の時間軸とランドスケープ

The Timeline of Plants on Landscape Planning

渡邊 幸太 Kota WATANABE

株式会社愛植物設計事務所
Ai-shokubutsu Landscape Planning Office Co.ltd



植物を扱う仕事と愛植という会社

私が所属する愛植物設計事務所（通称、愛植）は、ランドスケープを構成する要素の中でも特に「植物」を軸に置き、野生植物の生理生態、あるいは園芸種に詳しいスタッフなどが揃い、チームとして調査から設計、管理運営までの総合をランドスケープと位置付けてプロジェクトに向き合うユニークな会社である。私と愛植の出会いが大学院の時になる。当時、生きものが棲む空間のデザインに興味を持って造園を専攻した私は、実務としてそれに取り組む愛植でアルバイトをする機会を得て、その後、就職を決めた。

現在、私は設計者として植物を扱う立場にあり、多様な依頼先からの様々な要請に対し、景観や生態的経済的な視点から最適解を見出し、提案していくことを仕事のスタンスにしている。時には、植物の生育にとっては無理難題とも思えるような要望も頂くが、設計者としてそれにどう応えていくかが、植物を扱う仕事の難しさであり面白さでもあると思っている。建築外構に関わる仕事が多かった入社当時、建物が主役の事業スキーム、予め決められたスペース、自治体の条例など、様々な制約に縛られる中で、ランドスケープへの視野が狭まっていくように思った時期もあった。こうした時、ランドスケープの意味、仕事のやりがい、モチベーションの背中を押してくれたのは、植物を扱う仕事の面白さとその可能性であった。

本稿では、単年度契約の公共事業では比較的困難な古典的技法である「足し算」「引き算」の技術に、依頼元の理解を得ながら実直に向き合っている愛植のプロジェクトの中から、私自身が関わり学んだ2つの事例を紹介するとともに、これからのランドスケープへの私自身の抱負にふれたいと思う。

足し算のランドスケープ技術

最初に紹介するプロジェクトは、東京都心にある民間の超高層ビルの外構設計になる。写真-1は、植栽当初（2004年時）と現在（2020年時）の景観の変化である。本プロジェクトにおいて、愛植は植栽設計から施工監理、植栽管理運営の監修に至る現在も関わり続けている。

本プロジェクトの着手時、植栽地が人工地盤上でかつ棟間で収斂する強いビル風の吹き込みが課題であった。当時流行

り始めていた繊細な草本類の導入にも期待が寄せられたが、植物がそうした環境に適応できるかが不透明であった。そこで愛植は、防風林の考え方を援用し、段階的植栽を提案した。それは竣工時の植栽は外縁部の高木類や主要な地被類のみとし、竣工後の環境条件を確認しながら植栽管理の段階で草本類を補植する手法であった。これが足し算方式のランドスケープ技術である。

本プロジェクトは2003年に竣工し、現在までの20年近くにわたり、現場の環境変化に対する植物の応答を確認しながら、土地に根付いた植栽景観への誘導が実現している事例となる。私が入社する前からのプロジェクトであるので、残念ながら私は、植物の管理運営監修というステージからの参加ではあるが、往々に設計・施工・管理運営が分離発注されるという垣根を越え、一組織がその技術を繋ぎながら長年にわたりプロジェクトに関わらせて頂くことで、より豊かなランドスケープとなることを実感している。

植物が根付き、環境が安定してきた現在、植物の管理運営に関わる監修の一端を担う私は、鳥散布や天然下種で生えてきた実生木の保全や移植、高木類の抑制管理を中心とした作



(2004年撮影)



(2020年撮影)

写真-1 植栽景観の変化 (2004/2020)

業をお願いすることが増えている。植栽の生長段階に応じた適切な作業項目の設定と、それに伴う管理運営のコスト抑制も、本技術の大きな効果といえる。

引き算のランドスケープ技術

2つ目に紹介するプロジェクトは、東日本大震災による津波でさらわれた約40haの広大な住宅密集跡地の公園設計で、復興の象徴としての地域固有の杜（もり）を創るプロジェクトになる。計画地は、高い地下水位や冬の寒さ、さらには強風・潮風による乾燥や塩害が想定される過酷な条件の中で、どのように杜をつくっていくか、このプロジェクトの最大の課題であった。設計チームに野生植物の生理生態を専門とする調査チームが加わり検討を重ね、林業の造林技術を用い、苗木を密に植栽して環境に馴染ませながら育て、苗木の生長に応じて間引きながら目標とする杜に近づけていくことを提案した。これが、愛植の引き算のランドスケープ技術である。

まずは現地の強風・潮風を和らげる杜を早期につくり、公園での多様な活動を支える安定した環境をつくることを目指した（図-2）。当初植える苗木は、現地環境に適應できるマツ類やヤナギ類などを選定した。マツ類やヤナギ類は四季の彩りには乏しく、当然のことながら、事業主や市民からもっと大きい木を、もっと華やかな木を、もっと草花を……といった要望も頂いた。そのような場面で説得力を持ったのが、調査チームの科学的知見であった。

調査チームは、適地適木を検討するにあたり、計画地内外のみならず広域に植生調査や文献調査、同時に、現地環境下での植物の適應を確認するための試験植栽も行い、地域固有の杜の実現に向けた基礎条件を整えていた。その知見は、関係者間の合意形成に対して大きな説得力と意味を持つこととなった。植物の扱いは想像以上に難しく、専門的知見の検証が必要になること、そして設計者は常に現地の環境や植生を確認しながら設計へのフィードバックを意識することの重要性を実感した場面でもあった。

本公園は、杜づくりに取り組む被災地の人々の姿も復興の象徴として位置付けている。それは時間をかけて杜をつくることを意味している。現在、私は杜づくりの管理計画立案の一端を担っており、樹木の間引きを前提とし、現段階では想定できない植物や環境の変化に対し、順応的管理の実践にチャレンジしたいと思っている。

おわりに

愛植の仕事は、どのプロジェクトも植物の管理運営までを含めてステージを組み立てることをスタンスにしている。中には30年以上継続しているプロジェクトもある。紹介させて頂いた2つの事例は、民間と公共、設計手法の違いはあるが、いずれも同じ現場を長く見続けるという点で共通している。「植

● 植栽当初



● 植栽後3～5年程度



● 植栽後10年程度～



● 植栽後15年程度～



図-2 杜づくりのプロセス

物を扱う仕事」の本質の糸口を見出すことができたように思うプロジェクトでもあった。土地の歴史や植物の時間軸を考えた仕事が、本来意図した風景の実現に繋がっていくこと、現在はそこにランドスケープの仕事の面白さと可能性を感じている。

そして、「植えた植物を枯らさない」ということも学んだ。それは仕事であっても趣味であっても、植物を扱う者の当然とも言える義務であると思う。相手が生きものである以上、植えた環境やその変化に対する応答には敏感で、街中を歩いても元気がない植物たちが多く目に留まる。「枯らさないこと」は単純ながらも中々難しく、私自身も仕事を通じて日々、試行錯誤の繰り返しであるが、公共空間において大事な使命と感じている。

末尾ながら、原稿作成にあたり、弊所の諸先輩に当時を確認する中で、改めて示唆を得た。そしてまた、執筆の機会を頂いた学会に御礼を申し上げたい。

（略歴）

1988年東京都生まれ。明治大学部農学部農学科卒。千葉大学大学院園芸学研究科緑地環境学コース修了。2013年より株式会社愛植物設計事務所勤務、現在に至る。